

第43回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム



日時： 2023年10月21日(土)～22日(日)

会場： 慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 2階 中会議室

大会責任者 辺見葉子（慶應義塾大学文学部）

（連絡先 hemmi@keio.jp）

ハイブリッド形式(対面参加またはZoomでのオンライン参加)

✚ Zoomへのリンクは、大会1週間前に会員用メールマガジンにてお送りします。

✚ 参加費: 会員は無料 / 非会員500円(対面参加の場合のみ)

第43回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月21日(土)

- 12:30~ 受付開始
13:00 挨拶 代表幹事 森野聡子
- 13:00~13:45 研究発表 1 13世紀末の韻文アーサー王物語『クラリスとラリス』における
ゴーヴァンの名誉回復
発表者 渡邊浩司 司会 不破有理
- 13:45~14:30 研究発表 2 ヘンリー・サムナー・メインと「プレホン法」
発表者 廣野元昭 司会 梁川英俊
- 14:45~15:30 研究発表 3 Irish Castles, the Hō-Ō-Den Phoenix Pavilion and an Eisteddfod on Lake
Michigan: Celticism, Orientalism and the Medieval at the 1893 Chicago World's Fair
発表者 Amy C. Mulligan 司会 森野聡子
- 15:45~17:15 講演 アイルランド史へのアプローチの変遷
——日本における、そして私にとっての——
講演者 山本 正 司会 山本信太郎
- 17:30 懇親会

10月22日(日)

- 10:00~ 受付開始
- 10:30~11:15 研究発表 4 スコットランド・ゲール語詩集『カルミナ・ガデリカ』における
自然信仰とキリスト教の融合
発表者 井川恵理 司会 岩瀬ひさみ
- 11:15~12:00 研究発表 5 Clarence to Clarente?: 頭韻詩『アーサーの死』におけるモードレッドの剣再考
Making of Clarente: the Sword of Mordred in the Alliterative *Morte Arthure*
発表者 不破有理 司会 辺見葉子
- 12:00~12:15 総会
12:15~13:15 昼食
- 13:15~16:00 フォーラム・オン ウェールズ語訳聖書の成立と受容について
司会・趣旨説明 森野聡子
概説:ウェールズ語訳聖書誕生への道 山本信太郎
発表 1 1588年のモルガン訳新約聖書および詩編で用いられたウェールズ語
発表者 小池剛史
発表 2 近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて
発表者 山本信太郎
発表 3 欽定訳聖書の成立と受容
発表者 寺澤 盾
- 16:00 閉会の辞 大会責任者 辺見葉子

アイルランド史へのアプローチの変遷

——日本における、そして私にとっての——

Changing approaches to Irish history in Japan and for me

講演者：山本正
(大阪経済大学 経済学部 教授)

日本におけるアイルランド史へのアプローチは、時代とともに変化してきた。明治から昭和戦前までは、日本が植民地を有する帝国であったことから、とくに台湾や朝鮮半島統治との絡みで、植民地アイルランドと本国イギリスの関係あるいはイギリスによるアイルランド統治のありかたが注目された。第二次世界大戦後には、帝国主義時代の終焉・脱植民地化という世界的動向のなかで、いち早く植民地からの独立を果たし国民国家へ移行したアイルランドの対英ナショナリズムに関心が移った。

しかし、わたしがアイルランド史研究を始めた1980年代にもなると、国民国家という国家形態の問題点も目立つようになるなか、アイルランド史へのアプローチも変化を余儀なくされる。ちょうどそのころポーコックの主唱する「(新しい)ブリティッシュ」に触れた、そして発足当初からイギリス帝国史研究会に参加した私に開けたのは、ブリティッシュ諸島ならびにイギリス帝国のなかでアイルランド史にアプローチするという道である。以来、早くも30年以上の年月が経った。

だが、アイルランドがEUのなかにあって1990年代以降「ケルトの虎」と称される驚異的な高度経済成長をとげ、これに伴いリベラルで多文化な国に変身を遂げる一方で、イギリスはといえばEU離脱(Brexit)による自縛自縛の状態に陥っているいまの時代は、日本からのアイルランドへの関心、そしてアイルランド史へのアプローチにも、新たな変化を要求しているのかもしれない。

フォーラム・オン 趣旨説明

ウェールズ語訳聖書の成立と受容について

Y Beibl Cymraeg: Hanes y Cyfieithiad, y Fersiynau, a'u Derbyniadau

ウィリアム・モルガンによるウェールズ語訳聖書(1588年)は、ウェールズ合同法によって公共圏の言語としての位置を失ったにもかかわらずウェールズ語が現代まで存続した大きな要因とされる。こうした評価は、ウェールズ研究者のなかでいわば「定説化」しており、ウェールズ語訳聖書が実際どのように流通し人々に受容されたのかを実証的に検証することはあまりなされてこなかった。今回のフォーラムでは、モルガン訳聖書がウェールズ語文化そしてウェールズ社会にもたらした影響について再検討する。その際、1611年の「欽定訳聖書」の成立事情と普及状況と比較することで、新たな論点や考察を広げたい。

フォーラムの構成は以下のとおりである。ウェールズ語訳聖書が誕生するまでの経緯についての山本信太郎氏による概説に続き、言語面から小池剛史氏、社会史的側面から山本氏、そしてイングランドにおける英訳聖書の成立事情について寺澤盾氏に発表いただく。フロアをまじえたディスカッションでは、ウェールズ以外のケルト諸語圏における俗語訳聖書の状況や、言語の規範としての俗語訳聖書の役割等についても取り上げられればと思う。

(文責: 森野聡子)

フォーラム・オン発表

近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて

Towards a Social History of the Diffusion of the Welsh Bible in Early Modern Wales

発表者: 山本信太郎
(神奈川大学)

本フォーラム・オンにおける山本の報告は、短い前半パートとメインの後半パートに分かれる。前半パートでは、1588年の歴史上初のウェールズ語聖書(モルガン訳聖書)成立の経緯について、特に第一次ウェールズ合同法によって、司法行政の場からウェールズ語が排除されたにもかかわらず、合同法と同じウェストミンスターの議会制定法によって、イングランド王国の「国策」として聖書のウェールズ語への翻訳が命じられた(1563年)背景を説明する。

後半パートでは、一般にウェールズ(語)史上の金字塔と評価されるウェールズ語聖書が、実際にウェールズ社会においていかに普及し、どのように読まれたのか(あるいは読まれなかったのか)を、いわゆるピューリタン革命の時期までを中心に、断片的な手がかりから解明することを試みる。そもそも、ウェールズ語聖書翻訳法が求めた「普及」はどのような範囲のものであり、それはその後どのように補強されたのか。そして、ウェールズ語聖書は教区教会ではどのように購入され、保管され、礼拝で用いられたのか。さらにはウェールズ人家庭では、どのように所有され、読まれたのか。特に欽定訳聖書出版を受けて改訂された1620年版、初の小型聖書である1630年版の登場などのインパクトとも関連付けて考えてみたい。

1588年のモルガン訳新約聖書および詩編で用いられたウェールズ語

The Welsh language as used in the New Testament and the Psalms in William Morgan's Bible (1588)

発表者：小池 剛 史
(大東文化大学)

ウィリアム・モルガン訳聖書(1588年)の成立にあたり、新約聖書および詩編については、ウィリアム・セイルズベリらによる新約聖書訳および詩編訳が大きく寄与しているとされている。

新約聖書のモルガン訳の基盤はセイルズベリ訳のウェールズ語であるものの、しばしば、この両者のウェールズ語は比較される。人文主義であったセイルズベリは、綴り、語彙、また文法の面で、「文学的虚飾」とも取れる擬古的な言葉を用いたのに対し、モルガンは当時のウェールズ語話者に馴染のある言葉遣いを旨としたとされている。他方、モルガンは職業詩人らの間で共有されていた文章語や詩の韻律規則に精通しており、それゆえモルガンの言葉遣いも、「当時の話し言葉とは著しく乖離した、極めて文学的、擬古的なもの」であったが、それが「威厳ある格調高いウェールズ語」のイメージを生み、近代以降の標準ウェールズ語の発達に貢献したとされている。

本研究では、モルガン訳聖書の新約聖書および詩編の一部を、特に綴りと語彙、および動詞句構造および文構造という文法的観点から、対応するセイルズベリ訳と比較し、どのような改定がなされているのかを検証する。また、同時代に出版された他の散文資料の言葉遣いとも、同様の観点からの比較対照を行う。このようにして、モルガンが新約聖書で用いたウェールズ語が具体的にはどのような言葉遣いであったのかを、二つの比較から明らかにしたい。

欽定訳聖書の成立と受容

The Making and Reception of the Authorized Version

発表者：寺澤 盾
(青山学院大学)

20世紀以降、部分訳も含めれば1,000種を超える英訳聖書が上梓されているが、そうした中、400年余りに刊行された『欽定訳聖書』はいまだに多くの人々によって愛読されている。

欽定訳聖書が成立する直前の16世紀は、イギリスではルネサンスや宗教改革の影響を受け聖書翻訳の気運が強まり、ウィリアム・ティンダルによる新約聖書の英訳(ドイツで1525年に出版)を皮切りに、『カヴァデイル訳聖書』、『ジュネーヴ聖書』、『主教訳聖書』など多くの英訳聖書が続々とあらわれた。一方で、ヘンリー8世の治世下の1546年ティンダル訳、カヴァデイル訳の新約聖書の所有が禁止され、カトリック信者であった女王メアリ1世による新教徒迫害と英訳聖書発禁など、宗教的抗争が相次いだ。こうした混乱・確執を治めるために、1604年1月16日にジェイムズ1世隣席のもと宗教会議が開催され、新たな英訳聖書(欽定訳)の編纂が決議された。その翻訳方針は、基本的には『主教訳聖書』に従うこと、それに変更を加える場合は他の先行訳に依拠することとなった。したがって、後世において「英語散文の金字塔」と称えられた『欽定訳聖書』は、実は、書き下ろしの新訳ではなく、先行の英訳聖書に依存するところが大きいと言える。

本発表では、このような事情を鑑み、まずは『欽定訳聖書』以前の英訳聖書から解き明かし、その後、欽定訳の刊行までのプロセス(翻訳委員認証、翻訳方針)、印刷と流布状況(初版出版部数、2つの異なる初版、『ジュネーヴ聖書』との競合)、受容(発刊当時の批判、サヴォイ国教会聖職者会議による地位確立、米国における受容)についてお話しできればと思う。

研究発表 1

13世紀末の韻文アーサー王物語『クラリスとラリス』におけるゴーヴァンの名誉回復

*Claris et Laris, roman arthurien en vers de la fin du XIIIe siècle:
une réhabilitation du personnage de Gauvain*

発表者： 渡 邊 浩 司
(中央大学)

円卓騎士団の筆頭で宮廷風礼節の鑑とされるアーサー王の甥ゴーヴァン(英語名ガウェイン)は、古フランス語韻文と散文により増殖していくアーサー王物語群の中で「動かぬ規範」として使い古され、次第に距離を持って描かれるようになっていった。12世紀後半のクレティアン・ド・トロワの韻文物語群においてすでに何度も窮地に追いこまれて汚名を着せられているゴーヴァンは、13世紀の散文物語群では「悪魔の手先」(『聖杯の探索』)や残酷な騎士(『散文トリストラン物語』)へと変貌している。

こうして振り子が否定の極まで進められてしまったゴーヴァン像を前に、13世紀後半の物語作家には数多くの可能性が与えられた。「散文」か「韻文」、「聖杯」のテーマの有無、物語群の一部とするか独立した作品にするかという選択だけでなく、ゴーヴァンに対する距離の取り方も物語作家の裁量に委ねられたのである。本発表では、1270年頃の作と推測される古フランス語「韻文」による長編アーサー王物語『クラリスとラリス』で描かれたゴーヴァンに焦点をあて、その名誉回復の試みについて検討する。

研究発表 2

ヘンリー・サムナー・メインと「ブレホン法」

Henry Sumner Maine and “Brehon Law”

発表者： 廣 野 元 昭
(日本ケルト学会会員)

英国歴史法学派の頭領ともいえる Henry Sumner Maine (1822-1888) はその著書 *Early History of Institutions* (1875) において、その大部分の章を費やして中世アイルランドの成文法、いわゆる「ブレホン法」について論じており、そして彼の主著『古代法』(*Ancient Law* (1861)) での主張の一部に、かなり大きな修正、ないし留保が加えられるに至っている。

本報告では、これまで必ずしも十分には行われてこなかった、同書での議論と、その資料的基盤となった *Ancient Laws of Ireland* (ALI) との関係について検討したい。21世紀になってから、Maine が、ALI の編纂者とは異なり、アイルランドの土地立法への慣習的権利の導入を批判していた事実が明らかとなっているが、その背景を見直すとともに、現代の中世アイルランド法研究にいかなる示唆を与えうるかについても考えたい。

研究発表 3

Irish Castles, the Hō-Ō-Den Phoenix Pavilion and an Eisteddfod on Lake Michigan: Celticism, Orientalism and the Medieval at the 1893 Chicago World’s Fair

発表者： Amy C. Mulligan
(University of Notre Dame)

This paper examines the medieval at one of the 19th century’s most transformative events, the 1893 Chicago World’s Fair or Columbian Exposition, which attracted over 27 million visitors. Known as the “White City” for its white-clad exhibition halls, the World’s Fair also celebrated the successes of primarily white European nations in the official Fairgrounds. Most exhibits featuring so-called “primitives” and peoples of color were relegated to the peripheral recreational grounds on the Midway; siting Villages and

Marketplaces (Indigenous American, Laplander, Irish, Japanese, etc.) outside the White City has rightly been read in terms of racialized 19th c. conceptions of alterity. However, I argue that strategic use of the medieval -- architecture, iconography, history and myth -- shows how Irish, Welsh and Japanese people used the World's Fair to undermine racist stereotypes regarding "Celts" and "Orientals" that circulated in 19th-century America and beyond. The Irish Village, for instance, invited visitors to experience medieval lord- or ladyship in an ancient hall, buy a Tara brooch—Queen Victoria acquired two—and embrace an exclusive Irishness. In the exquisite Hō-Ō-Den, based on the Phoenix Pavilion of Uji's medieval Byōdō-in Temple, visitors participated in a tea ceremony and inhabited a highly refined Japanese world, after which they might purchase a lacquered fan in the Japanese Bazaar to bring the trending aesthetic desire for "Japonisme" into their own homes. At the Welsh Eisteddfod, with its parade of richly-robed Celtic bards, expert literary and musical performances showcased a kind of Celtic High Culture to disprove stereotypes about Irish and Welsh backwards simplicity and cultural poverty. The Chicago World's Fair was, I argue, an important stage for contesting racializing prejudices regarding the inferior otherness of "Celts" and "Orientals," with strategic uses of the medieval driving global appreciation for Irish, Welsh and Japanese identity and cultural achievement.

研究発表 4

スコットランド・ゲール語詩集『カルミナ・ガデリカ』における自然信仰とキリスト教の融合

Emersion of Animism and Christianity in *Carmina Gadelica, Hymns and Incantations*

発表者: 井川 恵 理
(桜花学園大学)

スコットランド北西部島嶼部における歌謡類を素材とされる『カルミナ・ガデリカ 聖なるものへの歌と祈り *Carmina Gadelica, Hymns and Incantations*』(1900-1971) は19世紀半ばから税収吏としてヘブリディーズの島々を回っていたアレキサンダー・カーマイケル (Alexander Carmichael, 1832~1912) により収集・編集され、その死後、関係者に引き継がれ全6巻566編の詩集として発行された。島民が紡いできた語りを書き留めた取材メモをもとに編まれ、家、身体、家畜、火、水、月、太陽、種まき、収穫、鳥、樹木、織物、妖精等、島民の生活をとりまく対象への祈りの歌と受け止められる形式を持つ作品が多い。本発表では、カーマイケル本人の編集になる 1、2巻を中心に、当時の諸島における生活記録を踏まえ、自然信仰とカリッック的要素が混在する表現を分析し、いかにしてアニミズム的要素が信仰として成立するように構成しているかを考察する。

研究発表 5

Clarence to Clarente?: 頭韻詩『アーサーの死』におけるモードレッドの剣再考

Making of Clarente: the Sword of Mordred in the Alliterative *Morte Arthure*

発表者: 不 破 有 理
(慶應義塾大学)

14世紀末の作といわれる頭韻詩『アーサーの死』 (*Alliterative Morte Arthure*) はサー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』 (Sir Thomas Malory, *cLe Morte Darthur*, c.1469) の典拠としても知られるが、謎多き作品である。作者も正確な制作年も不明であることに加え、人物造型も特異である。本発表では、モードレッドとアーサーの最後の決戦場において、アーサーのエクスカリバーに対抗してモードレッドが手にした「クラレント」 (Clarente) という剣に注目する。クラレントは中英語アーサー王ロマンスには登場しない剣名である。どのように剣クラレントが頭韻詩『アーサーの死』に登場し、モードレッドが手にする剣となったのか、その意義を14世紀の中英語ロマンスやEdward Utterson 編 *The History of the valiant King Arthur of Little Britain* を参照しつつ検討したい。

2023年度 日本ケルト学会 総会

議題

1. 2022年度決算報告および監査報告
2. 2023年度予算について
3. その他

報告

1. 創立50周年記念論文集について
2. 来年度の研究大会について
3. その他

会場案内

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎2F 中会議室



■交通アクセス

・日吉駅(東急東横線、東急目黒線／横浜市営地下鉄グリーンライン)徒歩1分

※東急東横線の特急は日吉駅には停車しません。





来往舎はこちら⑨番の建物になります。

日吉駅改札より東口に出て、信号を渡り、銀杏並木道を直進して下さい。100mほど登ったところにあるガラス張りの建物が来往舎です。